

臨生のアート

精神科病院内での芸術活動：1968-2011



共同制作『モナリザ』

今回、京都造形芸術大学において、安彦講平氏の約40年間にも及ぶ精神科病院内での〈造形教室〉から生み出された作品群をまとめた形で展示する機会を得られました。

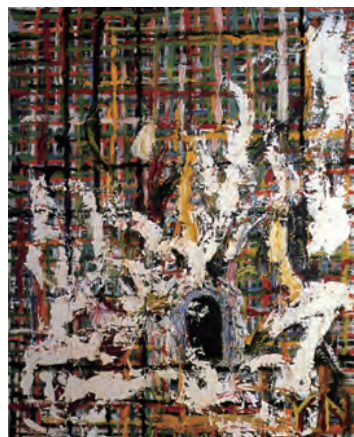
その自由な表現によるアートは、人間という存在の神秘を圧倒的な迫力であらわしています。なぜこのような表現が可能になったのでしょうか。

それはこの〈造形教室〉が、アートを通じて個々人のなかにある苦悩、不安、また夢や喜び、生や死に対する感情など深いものが、メンバーや安彦氏とのそれぞれの多様な関係を通じて共に動き出す磁場であり、医療・福祉の世界の「芸術療法」や、芸術の世界の「アウトサイダー・アート」とも異なった、いわばプロセスとしてのアートとよびうる性格をもっていることと関係があるでしょう。

暗いものを消すというような治療目的なのではなく、自由に表現し、表現されたものを皆で共有、共感することで再び生が輝き出すという意味で「臨(生)のアート」というタイトルをつけました。ご高覧のほどお願い致します。

京都造形芸術大学
藤澤三佳

始まりの世に
いきりま
て、り
きに絵の
た生のな
終が



『卒への黒い扉』名倉要造

〈造形教室〉の活動は、いわゆる「教育」や「治療」といった、上から与え、課せられ、外から評価、解釈するものではなく、それぞれが表現行動の主体となつて自由に描き、身をもった自己表現の体験を通して、もう一人の自分との出会い、潜在する個性や可能性を引き出し、自らを「癒し」支えていく「営みの場」である



『endless mother』鈴木敏子

〈ギャラリートーク〉

作者たちが自作の前で語ります。14日(土)15:00～、15日(日)13:30～の2回。

〈会場〉

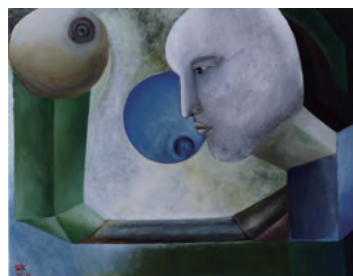
Galerie Aube ギャラリー・オーブ

京都造形芸術大学 人間館1階

606-8271 京都市左京区北白川瓜生山2-116

市バス5系統「上終町京都造形芸術大学前」下車すぐ
叡山鉄道叡山線「茶山駅」より徒歩10分
駐車場・駐輪場はございませんので、公共の交通機関をご利用ください。

Tel. 075-791-9144(平日) / 075-791-9121(土日)

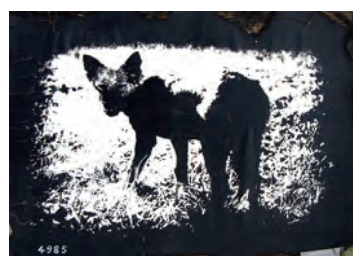


『球体への想い』島崎敏司

僕は思う、病に
でいるといわん
描いているうち
は、千載一遇の
チャンスなのだ



『風呂場を確認する男』本木健



『野良犬』奥村欣矢



『影の叫び・療獄への道』栗原葉子

